

岩田礼教授荣休纪念论文集 上册



ISSN 2436-6471

岩田礼教授榮休紀念論文集

上冊

《岩田礼教授榮休紀念論文集》編輯組 編



日本地理言語学会

2022

『地理言語学研究』モノグラフシリーズ No. 2-1
ISSN 2436-6471

《岩田礼教授榮休紀念論文集》編輯組編
《岩田礼教授榮休纪念论文集》（上冊）2022

doi: <https://doi.org/10.5281/zenodo.6342364>

© 2022 by Authors. All rights reserved.

発行日： 2022年3月31日

発行者： 日本地理言語学会

ウェブサイト：<https://geolinguistics.sakura.ne.jp/>

所在地： 東京都渋谷区渋谷4-4-25 青山学院大学G1305研究室



目 录

上 册

致謝	v
岩田礼履歴及び教育実績	vii
岩田礼研究業績一覧	xi
曹志耘：回望路已远——我所经历的中日汉语方言学交流往事 1
石锋：信息-焦点纵横谈：从焦点连续统谈起 9
江海燕：不同功能角色代词在语句中的时长表现 16
王萍、王晓雯：日语音高重音和语调互动关系的实验研究—兼论与汉语声调和语调叠加共现关系的共性和差异 32
高橋康徳：上海語窄用式変調の再考 52
古屋昭弘，和平 译：关于带巴楼本《正字通》 70
丁锋：慧琳音義中四家文本引《切韻》考 85
橋本貴子：義淨の音訳漢字における Sanskrit の/v/の音訳について 109
松江崇：揚雄『方言』所収の「北燕」「朝鮮」方言語彙の性質 134
宮島和也：再論秦文字系統中的「於」——試談秦與六國書面語的接觸影響秦文字書寫的一例 151
戸内俊介：殷代单位词刍议 165
陳怡君：漢語繫詞「是」的歷史發展——由禪宗語錄《臨濟錄》切入觀察 182
木津祐子：「把」字句から見る長崎唐通事資料 196
ラマール・クリスティーン：“洗手去”（手を洗ってこい）再考：南北対立を超えて 208
王莉宁：汉语方言“漏斗式”的地理演变模式 219
汪维辉、王文香：“长江型词”与汉语词汇史研究 230
铃木博之：滇川藏交界处藏语支语言中的“狗”——相关语音形式的地理语言学分析 253
秋谷裕幸、汪维辉、野原将挥：说{狗} 264
太田斋：“现在”义词试探 281
李雪敏：汉语“追赶”义词的共时分布与历时演变 293
铃木史己：试论汉语词汇的系统化——以表〈玉米〉义词为例 306
王周明：小议介词语法化进程中“往”与“于、向、到、在”的共现现象 325
竹越孝：語彙交替と文法形式—飲食動詞の変遷を例として— 342

下 册

苏晓青：江苏北部多方言交界地区语言地理学研究概要 1
远藤光晓：根据调类合并归纳出调值演变的方向性——以河北省唐山市 一帶方言为例 41
黄河：用集成数据分析增加 ABA 分布对语音现象的解释效力 53
周磊、黄晓东：江西湘东方言的地理分布类型及其影响因素 66
黄绮烨：广东潮阳方言连读变调的类型及其地理分布 79
张勇生、王洁：鄂东南赣语的声调类型及其演变 94
孙建华：延安方言人称代词复数形式的地理分布和历史演变 109
孙凯、昂色拉加、桑吉克：玉树藏语（拉布话）反身-强调人称代词的 初步考察 129
支建刚：官话方言中 Z 变韵与子尾的并存现象 147
王桂蘭：〈茄燒白〉字類在屏東縣萬丹鄉的語音變體分佈研究初探 156
Hsiao-feng CHENG: Linguistic Geography of Fujian: The Words for ‘wind’ and ‘maple tree’ 171
李仲民：语言接触中的“类推”与“回避”——以台湾西海岸为例 187
石汝杰：上海市川沙方言音系 198
栗华益：试析闽语入声韵尾的演变 223
大岛广美：畲话的短调 247
徐建：皖西南方言开口一二等韵读齐齿呼现象考察 262
许井岗、汪恒璐：徐州方言古清入字新老变化的性质与特点 277
中野尚美：山西省靈石県北西部の嵌 r 化韻 292
遠藤雅裕：論臺灣海陸客語小稱詞[ə ⁵⁵]的來源 299
胡贵跃：安徽黟县方言的持续体 328
刘艳：山西文水话“V 脱”的句法语义特征考察 337
张盛开：平江各方言中的多功能动态助词 348
崔蒙：“嘎拉哈”小考 376
村上之伸：閩語の“なみだ”を表わす語形について 384
日高知恵実：方言の商業的利用—常州方言トランプの表記を例として— 395
劉乃華、吉村桜子 訳：至る能はずと雖も、然れども心は之れに郷往す —岩田先生との交友回想— 418



義淨の音訳漢字における Sanskrit の/v/の音訳について

橋本 貴子

神戸市外国語大学

要旨： 6世紀末以降のインド東部では/v/と/b/が同一の字形で表されるようになった。この変化にはインド東部の方言に生じた発音の変化が関係している。7世紀後半にインド東部で10年間留学し、帰国後7世紀末から8世紀初頭にかけて訳経を行った義淨の音訳漢字では Sanskrit の/v/が漢語の並母字で音訳される傾向が強い。この音訳傾向は義淨が滞在したインド東部の方言的特徴を反映している可能性がある。

1. はじめに

唐代以降の梵漢対音を扱った漢語音韻史研究では、一般に Sanskrit (以下 Skt) の現存テキストと音訳漢字との対照作業によって音類上の対応関係を確定させた上で、音訳時に依拠した漢語音の音価を推定する、という方法が採られている。但し各音類の具体的な音価を推定する際、場合によっては、漢語音韻史側の議論に加えてインド側の何らかの現象が関与している可能性を考慮する必要がある。

従来、梵漢対音を扱った研究によって、初唐に軽唇音声母の唇歯音化が起きていたことが指摘されてきた。その主な根拠は、(1) Skt の両唇音/p/ /ph/ /b/ /bh/ /m/が初唐の梵漢対音では専ら漢語の重唇音字で音訳され、軽唇音字で音訳されないこと、(2) Skt の/v/に対して唐代以前は並母字による音訳が見られたのに対し、初唐の梵漢対音では従来の並母字に加えて奉母字によても音訳されるようになったこと、にある。

(1)の点から初唐には重唇音と軽唇音との区別があったと推察される。橋本 2021 では、初唐の梵漢対音だけでなく初唐末期の成立と目されるマニ教の音訳讃歌においても重唇音字と軽唇音字の使い分けが見られることを指摘した上で、初唐末期までには軽唇音声母の唇歯音化がかなりの程度進行していた可能性が高いとの考えを示した。

(2)の点も奉母の唇歯音化を示している。だが初唐以降も一部の梵漢対音では、依然として Skt の/v/を並母字で音訳する傾向が見られる。この点は当時進行していたはずの軽唇音声母の唇歯音化と矛盾するかのように見えるため、何らかの説明を行う必要がある。

2. /v/の音価及び/v/を表す字形の歴史的・地理的状況

2.1 インドにおける/v/と/b/

Skt の/v/は本来、両唇接近音（半母音）[w]であったが、紀元前5世紀頃までに幾つかの方言においては唇歯接近音[v]、唇歯摩擦音[v]になっていたと考えられており、古代インドでは他に両唇有声摩擦音[β]のような発音もあった（Allen 1953: 57; Chatterji 1960: 75-76）。現代インドにおいて/v/は[v]や[β]と発音されるが、同じ音節内で何らかの子音に後続する場合は[w]のように発音される（Whitney 1896: §57; Chatterji 1960: 76）。但し Western and Eastern Uttar Pradesh、Bihar、Bengal、Assam、Orissa などのガンジス河中流域からインド東部に及ぶ地域では、Skt の/v/を語頭では両唇有声閉鎖音[b]で発音し、語中や語末の/v/もしばしば同様に発音するという（Chatterji 1960: 76）。この現象はこれら地域の方言の影響を受けたものと思われる。Masica 1993: 459 の Figure II.10 によれば、インド北西部、西部、南部に分布する Kashmiri、Lahnda、Punjabi、Sindhi、Rajasthani、Gujarati、Marathi、Sinhalese では/v/と/b/の区別が保存されているのに対し、ガンジス河中流域およびインド東部に分布する Western Pahari、Central Pahari、Nepali、Western Hindi、Eastern Hindi、Bihari、Assamese、Bengali、Oriya では失われている。

ガンジス河中流域およびインド東部における/v/の発音の変化は、/v/と/b/を表す字形の変遷に現れている。Dani 1963 によると、6世紀末のガンジス河中流域および Bengal では/v/と/b/の字形に混乱が生じて、/b/を表す字形が消失し、/v/を表す字形で/v/と/b/の両方を表すようになった¹。そして、この現象は周辺地域にも拡がりを見せている²（Dani 1963: 128、130、154、164; Dani 1963: Pl. Xb, XIb, XIVb）。

¹ Bühler 1904: 74 はこの現象が碑文では7世紀以降に見られるのに対し、写本ではそれ以前に起きていたと述べる。だがその根拠は「法隆寺貝葉」の字形にあるため、Bühler 1904 の考えには問題がある。「法隆寺貝葉」については本稿脚注 12 で後述する。

² ギルギット写本に見られる7世紀～10世紀頃の Gilgit/Bamiyan type II (シッダマートリカー系統の書体。Proto-Śāradāとも言う) および9世紀以降のシャーラダ一体 (Śāradā) でも/b/を表す字形がなく、/v/を表す字形のみが見える (Sander 1968: TAFEL 21-26)。ちなみ

4世紀～6世紀 6世紀末～8世紀



図1：ガンジス河中流域およびBengalにおける/va/と/ba/を表す字の変遷³

しかし中央インド、Rajasthan、ネパール⁴では7世紀以降も依然として/v/（横画の下に三角形または半月形を有する字形）と/b/（四角形）の区別を保存していた（Dani 1963 : Pl. XIb、XIIIb）。

2.2 悉曇写本における/v/と/b/

唐代にインドから直接中国にもたらされた梵本は、中国ではほぼ失われてしまつたが、留学僧が持ち帰ったと思われる極めて貴重な貝葉写本が日本に数点保存されている⁵。それらはいずれも6世紀から10世紀頃まで北インド全域で使用されていたシッダマートリカ一文字（Siddhamāṭrakā）で書かれている。また中国や日本で書写された梵本も日本には数多く伝わっており、それらはシッダマートリカ一文字の東アジア的変種である悉曇文字⁶で書かれている。以上の状況から、唐代の訳経に

に原民族宮蔵写本（11世紀頃）のシャーラダ一体では/v/と/b/が区別されている（葉少勇 2005 : 44）。また Melzer 2014 は早期シャーラダ一体（early Śāradā）で書かれたラサの写本において/v/と/b/が区別されていることを指摘し、Gilgit/Bamiyan type II とは対照的であるとして注目している（Melzer 2014 : 264-268）。

³ Dani 1963 : Pl. Xb, XIb を参考に本稿筆者が作成したもの。

⁴ ネパールの後グプタ体（Post-Gupta）の写本では/b/は四角形で/v/の字形とは区別されており、また8世紀のネパールの碑文でもなお/v/と/b/の区別が見られる（葉少勇 2005 : 21；Ye 2008 : 162）。/v/は上部に横画を冠する三角形であったが、7世紀前半に半月形を有する字形が現れ、7世紀後半には半月形の字形が三角形の字形に取って替わった（葉少勇 2005 : 21-22；Ye 2008 : 163）。

⁵ 梵字貴重資料刊行会 1980 : 3-9 に高貴寺、四天王寺、知恩寺、海竜王寺、清涼寺、東寺の貝葉写本の図版が収録されている。松田和信氏はこれら写本と玉泉寺の貝葉写本について研究を行っている（松田 1982、松田 1989、松田 2021）。従来これらの貝葉写本は『阿毘達磨俱舍論』の断簡と考えられていたが、松田氏の研究によって高貴寺、四天王寺、知恩寺、玉泉寺の写本が実際には『世間施設論』の断簡であることが明らかになった。なお海竜王寺、清涼寺、東寺の写本については未同定のこと。

⁶ 研究者によってはシッダマートリカ一系統の書体全般を指して「悉曇文字」と言うことがある。しかし本稿で言う「悉曇文字」は日本や中国等の東アジア地域で書写されたもののみを指す。悉曇文字で書かれた写本は筆記具（中国式の毛筆、墨、紙）、書字方向（しばしば縦書きされる）の点でインドの写本とは様相が異なる。更に一部の字形にはインドの字形との違いが見られる（橋本 2018）。よって本稿ではインドのシッダマートリカ一文字と悉曇文字とを区別し、後者を前者の東アジア的変種として扱う。

用いられた梵本の多くはシッダマートリカ文字で書かれていたと考えてよいだろう⁷。

悉曇文字はシッダマートリカ文字に由来し、日本で長らく伝習されてきた。悉曇文字の/v/と/b/の字形は酷似しているが、半月形の書き方のわずかな違いによって区別されている。*/va/*では半月形が左方向に張り出すように書かれた後、右下方向にまわして後に書く縦画に納められる。*/ba/*では半月形が左下方向にやや垂れ気味に書かれた後、終筆が右上がりにまわして押し上げられる⁸。



図2：悉曇文字における/va/と/ba/の書き方の違い

平安後期の写本である東京大学国語学研究室所蔵『仏母大孔雀明王経』⁹の悉曇文字で書かれた陀羅尼でも、一部に混乱が見られるものの、基本的には上に述べた半月形の書き方の違いによって/v/と/b/が区別されている。実際の字形については Hashimoto 2015 : 265-266 を参照されたい。

しかしながら、/v/と/b/の区別がない（或いは区別が明瞭でない）悉曇写本も存在する。9世紀頃の書写で唐写本と推定されている東洋文庫蔵『梵語千字文』¹⁰の悉

⁷ 場合によってはシッダマートリカ文字以外の文字で書かれた梵本が訳経に用いられることがあったと思われる。武后期には提雲般若や実叉難陀などコータン出身の僧侶がコータンから梵本をもたらし、更に訳経も行っている（段晴 2013 : 46；同書 : 169-184）。彼らが中国にもたらした写本の中には恐らくコータンのブラーフミー文字で書かれたものが含まれていたであろう。

⁸ 『悉曇字記』（T54, No. 2132）では、/va/について「一云字下尖（一説には字の下部が尖っていると言う）」（T54 : 1188b8）、また/ba/については「下不尖（下部が尖っていない）」（T54 : 1188b1）と説明されている。この『悉曇字記』は、唐代に漢人僧の智広が南天竺出身の般若菩提というインド僧のもとに行って教わった悉曇文字とその発音について記したもので、日本悉曇学において長らく重要視してきた。

⁹ 東京大学国語研究室 1986 : 1-208 所収。『仏母大孔雀明王経』は不空（Amoghavajra。705～774）の訳。

¹⁰ 東洋文庫・石塚・小助川 2014 : 1-47 に影印が収録されている。装丁様式と料紙の材料から唐写本と目されている（東洋文庫・石塚・小助川 2014 : 77-79；石塚 2015 : 334-337）。なお『梵語千字文』は義淨撰と伝えられている。この写本で/v/と/b/が区別されていないこ

曇文字では/v/と/b/がどちらも図2の(va)のように半月形が左側に張り出た字形で書かれている。この写本の悉曇文字の表記は後世の『梵語千字文』テキストと比べてはるかに正確であることから¹¹、誤写や誤解によって/v/と/b/が同じ字形で書かれたとは考えにくい。また東京国立博物館所蔵『梵本心経並びに尊勝陀羅尼』(所謂「法隆寺貝葉」)¹²でも/v/と/b/の区別が無く、どちらも/v/を表す字形で書かれている(Dani 1963 : 154 ; 同書 : Pl. XIIb. 12)。これら資料における/v/と/b/の表記が、上述した7世紀以降のインドでの表記をそのまま受け継いでいる可能性は十分にある。

3. 義淨の音訳漢字における/v/の音訳状況

玄奘(602~664)の梵漢対音では Skt の/v/が並母字と奉母字とで音訳される。並母字で音訳されるのは多くが/v/に前舌母音が後続する場合で、奉母字で音訳されるのは/v/に後舌母音が後続する場合である¹³(施向東 1983 : 31 ; 施向東 2009 : 23)。7世紀末の菩提流志訳『不空羈索呪心経』に至っては「部」vo の1例を除き/v/が悉く奉母字で音訳されている(李建強 2017a : 18 ; 李建強 2017b : 95)。これら奉母字による音訳は唇歯音化していたことの反映と考えられている。

ところが、7世紀末~8世紀初頭に訳経を行った義淨の音訳漢字では Skt の/v/が漢語の並母字で音訳されていることが多い。以下では、義淨の音訳漢字における/v/の音訳状況を整理して/v/が並母字で音訳される傾向が顕著であることを示し、更にそれがインド東部の方言的特徴を反映している可能性について論じたいと思う。

とは、義淨が滞在したインド東部の文字状況と合致し、義淨撰であることを支持するかに見える。しかし現時点では『梵語千字文』の作者に関する手掛かりが少なく、義淨撰であるかどうかは引き続き慎重に検討する必要がある。

¹¹ 松本 2007 : 35 ; 東洋文庫・石塚・小助川 2014 : 77

¹² この写本の画像は東京国立博物館のウェブサイトで閲覧可能である

(<https://webarchives.tnm.jp/imgsearch/show/C0057878> (2021年12月10日確認))。また梵字貴重資料刊行会 1980 : 2 にも図版がある。この資料はこの資料は当初6世紀の貝葉写本として紹介されたが、その後の研究では8~9世紀頃の書写で、中国または日本で制作されたものと推定されている。この辺りの議論については、橋本 2018 : 9-10 を参照。

¹³ 施向東 1983 : 41-47 および施向東 2009 : 72-79 の表を見ると、vi、ve は確かに並母字で音訳されることが多いが、va に対しては「婆」(並母)と「縛」(奉母)、van に対しては「槃」(並母)と「飯」(奉母)のように、a が後続する場合は時に並母字で、また時に奉母字で音訳されている。

3.1 義淨について

義淨は齊州（現在の山東濟南一帯）山莊の人。671年に海路でインドに向かう。途中シユリーヴィジャヤ国（Śrīvijaya。現インドネシア、スマトラ島パレンバン付近）に半年間滞在し、梵語文法を学習する。その後、マラーウ国（Malāyu）等を経由して673年に東インドのタームラリプティ国（Tāmralipti）に上陸する。この国に1年間滞在して梵語を学んだ後、ナーランダー（Nālandā）の地を中心に約10年間修学した。帰途、シユリーヴィジャヤに687～693年の間滞在して『南海寄帰内法伝』と『大唐西域求法高僧傳』を著述し、幾つかの翻訳も行った。695年に洛陽に入り、以後は洛陽と長安で訳経活動に従事した（王邦維 1988:253-267；王邦維 1995:1-26；宮林・加藤 2004:444-450）。

3.2 先行研究

義淨の音訳漢字における/v/の音訳状況を調査する前に、これまでに行われた義淨の音訳漢字に関する音韻学的研究について簡単に紹介しておく。

Coblin 1991 は義淨訳『仏説大孔雀呪王經』、同訳『金光明最勝王經』および義淨撰『南海寄帰内法伝』の音訳状況について整理を行っている。但し Coblin 1991 には『南海寄帰内法伝』からの挙例が無く、当該資料における音訳漢字の具体的な状況は明らかにされていない。

劉廣和 1994 は義淨訳『仏説大孔雀呪王經』と不空訳『仏母大孔雀明王經』とを比較し、両者の間に見られる音韻的特徴の違いについて論じている。また劉廣和 2011 は義淨訳『仏説仏頂尊勝陀羅尼經』と他の同本異訳の音訳状況について分析と比較を行っている。

王思齊 2015 は義淨訳『仏説大孔雀呪王經』の音訳漢字が反映する声母の特徴について、また王思齊 2017 は韻母の特徴についてそれぞれ論じている。

以上の先行研究では、義淨の音訳漢字において Skt の/v/が並母と奉母とで音訳されていることは示されているが、/v/が並母字で音訳される傾向があることは特に注目されていない。また Skt の/v/が唇歯摩擦音[v]のような音価であったことを前提に漢語の奉母の音価が議論されており、Skt の/v/の音価そのものに対する検討は行われていない。

なお、義淨の音訳漢字が依拠した方言音については、中原北部方言の一種（Coblin 1991:69）、北方東部地区の方言（劉廣和 1994:414；劉廣和 2002:146；王思齊 2015:258）と考えられている。本稿筆者もまた、橋本 2019 で述べたように、義淨の訳場

では当時の洛陽および長安の佛教界において主流とされた北方音の一種が使われていたと考えている。

3.3 資料

本稿で用いる資料は、(1) 義淨撰『南海寄帰内法伝』、(2) 同撰『大唐西域求法高僧伝』、(3) 義淨訳『仏說仏頂尊勝陀羅尼經』の三種である。

(1)(2)について、音訳漢字の表記および対応する Skt 語形は王邦維 1995 (略称『南海』) と王邦維 1988 (略称『高僧』) に拠る。これら資料に時折見られる非 Skt 的な形式¹⁴や非インド語の語形については分析の対象としないが、場合によっては脚注で言及することがある。王邦維氏が原語について判断を保留している音訳は扱わない。なお『南海』と『高僧』の出典における数字は校注部分の頁数を表す。

(3)は 710 年に長安の大薦福寺にて訳出されたものである (王邦維 1995 : 29)。陀羅尼部分の音訳漢字のみを取り上げる。テキストは『大正新脩大藏經』第 19 冊所収本 (No. 971。略称『尊勝』) を用い。音訳が対応する Skt の語形については畠部 2015 : 120-121 を参照する。

以上その他、先行研究で用いられた義淨訳『仏說大孔雀呪王經』の音訳状況も、必要に応じて取り上げる。

3.4 /v/の音訳状況

今回用いた資料では Skt の/v/に対する並母字による音訳例の異なり語数が奉母字のそれを大きく上回っている。以下ではその具体的な状況を見ていくことにする。但し既存の音訳を踏襲したと判断されるもの、例えば「提婆」deva、「跋摩」varman、

¹⁴ 例えば、朱爾 Cūrṇi (『南海』: 200) は Prākrit の-rṇ->-ṇṇ- の変化を反映している (Brough 1973 : 257-258)。また伐撃呵利 Bhartṛhari (『南海』: 201) Prākrit form である Bhatṭihariに基づいた音訳と考えられ (Brough 1973 : 258)、-rt->-ṭ- の変化 (Pischel 1981 : §289) および -r->-i- の変化 (Pischel 1981 : §50) を示している。

子音+rのrが先行子音に同化 (Pischel 1981: §268; 同書: §287) していたことを示す音訳も見られる。例えば、莫訶夜那鉢地已波 Mahāyānapradīpa (『高僧』: 88)、耽摩立底 Tāmralipti (『南海』: 56; 『高僧』: 88) 等。これらは精度の低い音訳とは考えにくい。なぜなら他の箇所では、鉢喇特崎擎 pradakṣīna (『南海』: 166)、鉢刺婆刺擎 pravārana (『南海』: 116; cf. 同書: 264) のように pra を「鉢喇」「鉢刺」と音訳しており、仮に原音が pra や mra であったならば「羅」「囉」「刺」「喇」等の來母字を加えることは十分可能だったと考えられるからである。なお『南海』『高僧』の注釈では諸本間の字句の異同が詳細に記されているが、上に挙げた問題の音訳についてはいずれも字句の異同に関する指摘が無く、「羅」「囉」「刺」「喇」等の字が脱落した可能性は低い。

「涅槃」nirvāṇa、「薩婆」sarva、「毘訶羅」vihāra、「毘奈耶」vinaya 等は分析の対象としない。

(1) 並母

/v/は主に並母字で音訳されている。全ての並母字による音訳例を以下に挙げる。

「婆」

安呴婆娑 Antaryāsa (『南海』: 75)

阿離耶慕讃婆悉底婆拖尼迦耶 Āryamūlasarvāstiyāda-nikāya (『南海』: 11)

地婆羯囉蜜呴囉 Diyākaramitra (『南海』: 207)

泥婆娑 niyāsa / niyāsana (『南海』: 100)

鉢刺婆刺擎 prayāraṇa (『南海』: 116; cf. 同書: 264)

娑多婆漢那 Sātavāhana (『南海』: 180)

婆哆 yāta (『南海』: 157)

納婆毗訶羅 Nayavīhāra (『高僧』: 11)

颯麼三曼多阿婆婆(引)娑 samasamantāyabhāsa (『尊勝』: 362c2-3)

瑣婆(引)婆毘戌(商聿下同)睇 svabhāyaviśuddhe (『尊勝』: 362c3-4)

「畔」

制底畔彈那 caityayandana (『南海』: 145)

制底畔睇 caityayande (『南海』: 144; cf. 同書: 258)

畔憚南 yandana (『南海』: 150; cf. 同書: 268)

畔睇 yande (『南海』: 139)

「伴」

輸婆伴娜 Subhayana (『高僧』: 36)

「跋」

跋臘毗 Valabhī (『南海』: 198)

蘇揭多跋囉跋者那 sugatayarayācana¹⁵ (『尊勝』: 362c4-5)

跋折囉(引)迦也僧喝且那戍睇 vajra-kāya-samhatana-śuddhe¹⁶ (『尊勝』: 362c10-11)

鉢喇底爾跋戴也 pratiniyartaya (『尊勝』: 362c11-12)

¹⁵ チベット訳（畠部 2015 : 121）に依った。梵本は sugatavacanā（畠部 2015 : 120）となっている。

¹⁶ 仏陀波利訳「跋折囉—迦耶—僧訶多那—秇提」から復元された形式（畠部 2015 : 120）に依った。梵本は vajrakāyasamghātaśuddhe（畠部 2015 : 120）となっており、「喝」との対応に問題がある。なおチベット訳は vajrakāyasamhatana（畠部 2015 : 121）となっている。

跋折曬跋折囉(引)掲鞞(引) vajri vajragarbhe (『尊勝』: 362c16-17)

跋折藍婆跋覩 vajram bhayatu (『尊勝』: 362c17)

「薄」

薄迦(抆也反) Vākyā (『南海』: 203)

「陞」

阿離耶悉他陞擺尼迦耶 Aryasthāyira-nikāya (『南海』: 10-11)

「薛」¹⁷

悉他薛擺 sthayira (『南海』: 130)

薛舍 Vaiśālī (『南海』: 8)

薛舍離 Vaiśālī (『高僧』: 88)

薛世 Vaiśeṣika (『南海』: 2)

薛唵 Veda (『南海』: 206)

薛擺研羯擺(彈舌道之) yelācakra (『南海』: 167)

¹⁷ 「薛」（霽韻並母）が vi、ve、vai に対応することについては説明が必要である。王思齊 2017: 43 の整理状況からは、義浄の音訳漢字では齊韻（および齊韻、霽韻）の字は一般に e に対応し、i(i)に対応することも比較的多いことが窺われる。よって霽韻字「薛」が vi と ve に対応する点は問題ない。他方 vai との対応については、Prākrit における ai > e の変化 (Pischel 1981: §60) を考慮すべきである。インド原音において Prākrit の影響で vai が ve と発音されることがある、それを「薛」で音訳したものと思われる。なお Prākrit では ai > e と並行して au > o の変化も起きており (Pischel 1981: §61)、更に e、o（長母音）は子音連続の直前で ē、ō（短母音）となり、時に i、u となることもある (Pischel 1981: §84)。これらの変化は義浄訳以外の音訳にも反映していることがある。

梁初に編纂された、仏典音義書の原型とも言うべき『出要律儀』音義の佚文が、近ごろ船山 2020 によって網羅的に収集された。収集された佚文は南朝梁の梵語学資料として貴重であり、またそこに含まれる音訳は『切韻』以前の梵漢対音として参考になる。同論文は更にこの資料の音訳語を研究し、『出要律儀』を含む六朝期の音訳では Skt の ai、au に対し i、u を表す漢字が用いられていると指摘した上で、この種の音訳方法が「音素還元主義」に基づくものと解釈している（船山 2020: 168-172）。Skt には母音階梯（vowel gradation）という現象があり、動詞語根から語幹や派生形を作る過程で i → e → ai、u → o → au と母音の交替が起きる。船山 2020 が提案する「音素還元主義」とは、この母音の交替を遡る形で、つまり ai や e を i に、au や o を u に戻して音訳することを言う。この解釈について、梵漢対音による漢語音韻史研究の立場からは次のように考える。Skt と漢語との間に對応上の体系的なズレが見られる場合、まずはインド側と漢語側双方の音韻史的背景を考慮する必要がある。船山 2020 が問題視する音訳のうち、支韻や齊韻の字 (i および e に対応しうる) で Skt の ai に対応するもの、および虞韻字 (u および o に対応しうる) で Skt の au に対応するものについては、上述した Prākrit における ai > e、au > o の影響を反映している可能性が検討されてもよいと思われる。

「毘」「毗」

- 毗輸安咀囉 Viśvāntara (『南海』: 184)
毗何羯喇擎 Vyākaraṇa (『南海』: 188)
毗睇陀羅必¹⁸桺(丁澤反)家 vidyādhara-piṭaka (『高僧』: 138)
鉢喇底毘失瑟吒(引)也 prati-viśiṣṭāya (『尊勝』: 362b29-c1)
毘輸馱(唐左)也 viśodhaya (『尊勝』: 362c2)
瑣婆(引)婆毘戍(商聿下同)睇 svabhāvavīśuddhe (『尊勝』: 362c3-4)
伽伽那毘戍睇 gaganavīśuddhe (『尊勝』: 362c7)
烏瑟膩沙毘逝也戍睇 uṣṇīśavījayaśuddhe (『尊勝』: 362c7-8)
迦也毘戍睇 kāyavīśuddhe (『尊勝』: 362c18)

「鼻」

- 鼻窣怖吒勃地戍睇 visphuṭabuddhiśuddhe (『尊勝』: 362c14)
鼻逝也鼻逝也 vijaya vijaya (『尊勝』: 362c15)

「苾」

- 攝拖苾馱(停夜反) sabdayidya (『南海』: 188)
苾力叉 yrkṣa (『南海』: 192)
苾栗底蘇咀羅 Vṛttisūtra (『南海』: 196)

(2) 奉母

Skt の/v/を奉母字で音訳する例は、並母字と比べると圧倒的に少ない。今回扱った資料では「伐」と「佛」の2字のみにとどまる。

「伐」

- 支伐囉 cīvara (『南海』: 65; 同書: 76)
鉢里薩囉伐擎 parisrāvāṇa (『南海』: 76)
薄伽伐帝 bhagayate (『尊勝』: 362b29)
薩婆痖伐刺擎毘戍睇 sarvāvaraṇaviśuddhe (『尊勝』: 362c11)

「佛」

- 尸利佛逝 Śrīvijaya¹⁹ (『南海』: 13; cf. 同書: 207)

¹⁸ 『高僧』: 133 は「必」字を欠くが、校注本における脱字と思われる。大正藏本の表記 (T51: 6c22) を参考にして「必」を補った。

¹⁹ Śrīvijaya は Skt 由来の地名ではあるが、その音訳である「尸利佛逝」「室利佛逝」「佛誓」はインドではなくシュリーヴィジャヤ現地での発音に基づいた可能性も考えられる。

室利佛逝 Śrīvijaya (『南海』: 168 ; cf. 同書 : 207 ; 『高僧』: 45)
佛誓 Śrīvijaya (『南海』: 207)

以上の例では奉母字「伐」「佛」が語中の/v/に対応している。

(3) 匣母合口字および合口介音

以上で見た並母字および奉母字による音訳の他、更に/v/が匣母合口字および合口介音で音訳されることもある。それらは子音に後続する/v/が[w]と発音されたのを反映していると考えられる（橋本2019 : 72-73）。

匣母²⁰合口字「和」

杜和羅鉢底 Dyārapati (『高僧』: 88)
杜和鉢底 Dyārapati (『南海』: 12)
杜和羅 Dyārapati (『南海』: 153 ; cf. 同書 : 15)
三摩戌和娑阿地瑟恥帝 samāśyāsādhiṣṭhite (『尊勝』: 362c19-20)

合口介音による音訳²¹

俱俱吒託賢說羅 Kukkuṭeśvara (『南海』: 23 ; 『高僧』: 40)
毗訶羅莎弭 vihārasyāmin (『高僧』: 113)
莎揭哆 syāgata (『南海』: 148)
瑣婆(引)婆毘戌(商聿下同)睇 syabhāvaviśuddhe (『尊勝』: 362c3-4)
薩婆薩埵難(引) sarvasattyānām (『尊勝』: 362c18)

虞韻字「輸」

毗輸安咀囉 Viśyāntara (『南海』: 184)

²⁰ 義淨の頃、匣母がまだ有声性を保存していたと考えられることについては、橋本 2019 で詳しく論じた。

²¹ 肥爪 1993 : 47-48 および劉廣和 1994: 412 (劉廣和 2002 : 140) は義淨訳『仏說大孔雀呪王經』において子音に後続する v が合口介音によって音訳されていること、その理由が子音に後続する v が[w]と発音されていたことにあると指摘している。王思齊 2017 : 45 は『仏說大孔雀呪王經』において果摂字「埵墮莎鎖」等の合口介音が Skt の/v/に対応する点に言及してはいるが、対応の理由について説明は行っていない。

最後の例は、子音に後続する/v/が[w]と発音されていたのを「輸」の韻母全体で表したものと解される。

4. 考察

前章で見たように、Skt の/v/は義浄の音訳漢字において、子音に後続する場合を除くと、多くは並母字で音訳されている。奉母字による音訳も一部見られるが、並母字の音訳と比べるとはるかに少ない。以下ではこのような音訳傾向について考察を加えることにする。

4.1 インド側の方言的特徴

今回用いた資料のうち『南海』と『高僧』は義浄がシュリーヴィジャヤ滞在中に執筆したものである。これら資料に見られる義浄独自の音訳は、恐らく義浄が旅行中およびインド滞在中に実際に聞いた発音に基づいて作成されたであろう。この推測はこれら資料に時折 Prākrit 的な語形や非インド語の音訳が見られることによって支持される。もちろん義浄が『南海』と『高僧』を執筆する際にインド文字で書かれた何らかの資料を参照した可能性は否定できない。しかしこれら資料は梵本から翻訳されたものではないので、音訳を行う際のインド文字への依存度は比較的低かったに違いない。従って『南海』と『高僧』において Skt の/v/が多く並母字で音訳される主な理由は、義浄が滞在先で実際に聞いた Skt の/v/の音価にあるのではないかと考える。

義浄の音訳漢字では Skt の/v/が主に並母字で音訳されることから、/v/は漢語の並母に最も近いと感じられたと推察される。ちなみに並母字は後述するように Skt の/b/ /bh/にも対応する。また少数ながら Skt の/v/を奉母字で音訳する例も見られる。今回扱った資料では、奉母字による音訳例は全て語中に集中しており、並母字による音訳例が語頭、語中のどちらにも見られるのと対照的である。あたかも位置によって/v/の音声的現れが異なっていたかのように見える。

では義浄が依拠した Skt 音の/v/の音価は一体どのようであったのだろうか。本稿筆者は[b]のように発音されていたと考える。

上述したように、現代のインド東部では/v/と/b/が共に[b]と発音されており、これは/v/と/b/の字形の変遷から 6 世紀末までに遡る現象であったと考えられる。義浄が滞在した 7 世紀後半のインド東部では/v/と/b/がいずれも[b]と発音されており、

それらを義浄は並母字で音訳した。但し時に、特に語中では[b]の閉鎖性が弱まって[v]や[β]のような摩擦音的な発音が/v/の異音として現れることがあり、それを唇歯音化していた奉母の字で音訳した、と解釈できるのではないだろうか。

4.2 梵本における/v/と/b/の字形

『尊勝』は梵本即ちインドの文字で書かれた Skt のテキストに基づいて漢訳されたものである。よって『尊勝』において Skt の/v/が多く並母字で音訳される理由として、漢訳時に基づいた梵本において/v/と/b/の字形に混乱が起きていた可能性を考える必要がある。

義浄訳『仏説大孔雀呪王経』でも並母字は Skt の/v/（および/b//bh/）に対応する（王思齊 2015 : 260）。王思齊 2015 は/v/と/b/がどちらも並母字で音訳される理由について、梵本の版本の違いによるもの、或いは伝写の過程で発生した誤写（悉曇文字では/v/と/b/の字形が極めて近いため）によるもの²²と考えている。

王思齊 2015 の言う「梵本の版本の違い」とは、義浄訳が依拠した梵本と王思齊 2015 が用いた梵本との間で/v/と/b/の表記に異同があるという意味ではないかと推測する。また「伝写の過程で発生した誤写」については、確かに悉曇文字の/v/と/b/は酷似しているため、漢訳時に基づいた梵本において/v/が/b/と誤って書かれていたのを、そのまま/b/と認識して並母字で音訳することはあったであろう。

しかしながら王思齊 2015 : 260 によると、義浄訳『仏説大孔雀呪王経』において Skt の/v/の音訳に用いられている並母字は婢跋毘菩婆鞞薜苾槃薄陞頻傍化畔僕鼻勃と多種に及ぶが、一方奉母字の使用は伐縛乏吠梵²³のみにとどまる。『尊勝』においても/v/は並母字（婆跋毘鼻）で音訳されることが多く、奉母字による音訳例は薄伽伐帝 bhagavate、薩婆痖伐刺擎毘戍睇 sarvāvaraṇaviśuddhe の 2 例のみであつ

²² 王思齊 2015 : 261。中国語原文は次の通り。「至於並母字既對 b，又對 v 的現象，我們認為，可能由於梵文版本不同，或者傳抄中出現錯誤，悉曇字 va、ba 字形近似。」

²³ Coblin 1991 : 70-71 は奉母字の対応する音節に母音 a が含まれる（但し吠率怒 viṣṇu は例外）ことに注目している。なお実際の奉母字による音訳例を見ると、語中の/v/に対応することが多いように思われる。例えば僧侍伐爾 samjīyani (T19 : 461b19 ; 田久保 1972 : 8)、雞伐帝 keyatte (T19 : 462a3 ; 田久保 1972 : 10) 等。だが次のように語頭の/v/に対応する例も見られる。縛芻 Vakṣu (T19 : 470c18 ; cf. 田久保 1972 : 40)、吠率怒 Viṣṇu (T19 : 467b2 ; cf. 田久保 1972 : 25)、乏怖魯 yaphulu (T19 : 460b5 ; 田久保 1972 : 4)。語頭の/v/も奉母字で音訳される点は『南海』『高僧』『尊勝』と異なるが、それが果たして資料の性質の違いによるものか、それともデータ量の違いによるものか、現時点では明らかにすることができない。この点は今後義浄訳のデータを蓄積して引き続き検討する必要がある。

た。このように並母字による音訳例は非常に多く、それら全てを梵本における悉曇文字の異同や誤写によって説明するのは難しい。同時に上述したインド側の方言的特徴が反映している可能性も考慮する必要があると思われる。

4.3 漢語側における軽唇音の状況

以上では、義浄の音訳漢字に見られる Skt の/v/の音訳傾向にインド側の方言的特徴および梵本における字形の問題が関係している可能性を指摘した。だが、そもそも漢語側において軽唇音化の唇歯音化が起きておらず Skt の/v/と/b/を区別できなかつたために、/v/が並母字で音訳されたのではないかという疑問も持たれる。

劉廣和 1994 は並母と奉母が共に Skt の/b/に対応し、また明母と微母が共に Skt の/m/に対応することを理由に、これら声母の分化を認めない。非母については非母字「發」が/ph/に対応することから、幫母から分化していたと考える。そして並母・奉母 [b-]、明母・微母 [m-]、非母（および敷母）[pf-]と推定している（劉廣和 1994 : 410；劉廣和 2002 : 136）²⁴。しかし劉廣和 1994 : 409 の対応状況を見ると、/b/に対応する奉母の例は「佛」のみ、また/m/に対応する微母の例は「文」のみであり、これらわずかな例を根拠として並母・奉母、明母・微母が分化していないと言えるかは疑問である。

一方、Coblin 1991 : 71 は義浄訳が依拠した漢語音において軽唇音の非母と奉母は重唇音の幫母・並母とは区別されていたと考えている。微母についても明母とは何らかの音声的な区別があったと推測している。

また王思齊 2015 : 261 は微母以外の軽唇音は分化していたと考えており、奉母については Skt の/v/に対応することから、その音価を[v-]と推定している。

今回扱った資料でも Skt の/v/が奉母字で音訳される例が少数ながら見られる。それらは奉母の唇歯音化の直接的な根拠と言えるかもしれないが、データ量として十分とは言い難い。よって、他の状況と合わせて考える必要がある。

(1) 初唐他の対音資料に反映される唇歯音化

橋本 2021 では初唐末期までには軽唇音の唇歯音化がかなりの程度進行していた可能性が高いことを指摘した。それは 7 世紀中葉の玄奘訳以降、Skt の/v/が漢語の奉母字で音訳されるようになること、また 7 世紀末頃の成立と考えられる漢訳マニ

²⁴ 劉廣和 2011 : 68 に示された中原音の声母表でも並母・奉母 [b-]、明母・微母 [m-]、非母（および敷母）[pf-]と推定されている。

教文献中の音訳讃歌においても中期ペルシア語の[f]が漢語の非・敷母字で、中期ペルシア語の[β]が漢語の奉母字でそれぞれ音訳されること、更に音訳における重唇音字と軽唇音字の使い分けがこれらほぼ同時期の複数種の対音資料に共通して見られることから推察される。従って、7世紀末～8世紀初頭の義浄の音訳漢字が依拠した漢語音においても同様に軽唇音の唇歯音化が起きていた可能性が高い。

(2)義浄の音訳漢字における重唇音と軽唇音の使い分け

今回扱った資料ではSktの両唇音/p/ /ph/ /b/ /bh/ /m/は基本的に重唇音字で音訳されている。以下、既存の音訳を踏襲したものではないと判断した、Sktの両唇音に対する全ての音訳例を挙げる。

/p/ : 輔母²⁵

「鉢」

阿鉢底鉢喇底提舍那 āpattipratideśana (『南海』: 115)

鉢履曼茶羅 Parimandala (『南海』: 100)

鉢里薩囉伐擎 parisrāvāṇa (『南海』: 76)

鉢喇特崎擎 pradakṣīṇa (『南海』: 166)

鉢刺婆刺擎 pravāraṇa (『南海』: 116; cf. 同書: 264)

三鉢羅併哆 sampragata (『南海』: 54)

蜜栗伽悉他鉢娜 Mṛgasthāpana (『高僧』: 103)

那伽鉢壘那 Nāgapatana (『高僧』: 182)

鉢喇底毘失瑟吒(引)也 prativiśiṣṭāya (『尊勝』: 362b29-c1)

鉢喇底爾跋戴也 pratinivartaya (『尊勝』: 362c11-12)

咀闥多步多孤徵鉢喇戍睇 tathatābhūtakotipariśuddhe (『尊勝』: 362c13-14)

薩婆揭底鉢喇戍睇 sarvagatipariśuddhe (『尊勝』: 362c18-19)

三曼頸鉢喇戍睇 samantapariśuddhe (『尊勝』: 362c21)

「半」

半者蒲膳尼 pañcabhojanīya (『南海』: 60)

²⁵ Skt の/p/が非母字「弗」で音訳されている例もある。即ち、提婆弗咀攤 Devaputra (『南海』: 161)、提婆弗咀羅 Devaputra (『高僧』: 103)。この中に見られる弗咀羅および弗咀攤は既存の音訳を踏襲したものである。なお「弗」は玄奘訳の陀羅尼において/p/に対応することがある。但しわざわざ反切を付してこの字を輔母に読むように指示していることから、玄奘当時「弗」の声母はもはや[p-]ではなくっていたと考えられる(橋本 2021:131)

半者珂但尼 pañcakhādanīya (『南海』: 60)

「波」

波尼你 Pāṇini (『南海』: 190-191)

波刺斯 Pārasī²⁶ (『南海』: 91)

波顛社擢 Patañjali (『南海』: 200)

波呾囉 pātra (『南海』: 76)

鄔波駄耶 upādhyāya (『南海』: 131)

鄔波三鉢那 upasampanna (『南海』: 127)

泥波羅 Nepāla (『高僧』: 10)

鄔波駄耶 upādhyāya (『高僧』: 181)

毘訶羅波羅 vihārapāla (『高僧』: 113)

「卑」

迦攝卑 Kāśyapīya (『南海』: 28)

「畢」

墨哆 pitta (『南海』: 157)

迦墨施 Kāpiśī²⁷ (『高僧』: 11)

「必」

毘睇陀羅必²⁸ 桁(丁澤反)家 vidyādhara-piṭaka (『高僧』: 133)

「補」

補嚕灑 補嚕籀 補嚕沙 puruṣah puruṣau puruṣāḥ (『南海』: 192)

「晡」

晡堤木底鞞殺社 pūtimuktibhaiṣajya (『南海』: 163)

「褒」

褒灑陀 poṣadha (『南海』: 115)

/ph/ : 滂母

「跋」

變跋 kapha (『南海』: 157)

²⁶ 宮林・加藤 2004: 123 を参照。なお王邦維氏は原語を Pārasa としている (『南海』: 92)。

²⁷ 王邦維氏は原語の候補として他に Kapiśā、Kāpiśā、Kāpiśā を挙げる (『高僧』: 32)。

²⁸ 『高僧』: 133 は「必」字を欠くが、校注本における脱字と思われる。大正藏本の表記 (T51: 6c22) を参考にして「必」を補った。

「怖」²⁹

鼻窣怖吒勃地戍睇 visphuṭabuddhiśuddhe (『尊勝』: 362c14)

「撥」

颯撥³⁰囉擎 spharāṇa (『尊勝』: 362c3)

/b/ : 並母³¹

「盤」

蘇盤多 subanta (『南海』: 192)

「勃」

勃陀(引)也 buddhāya (『尊勝』: 362c1)

鼻窣怖吒勃地戍睇 visphuṭabuddhiśuddhe (『尊勝』: 362c14)

薩婆勃陀阿地瑟恥多戍睇 sarvabuddhādhiṣṭhitaśuddhe (『尊勝』: 362c15-16)

勃陀勃陀(停也反) budhya budhya (『尊勝』: 362c20)

「菩」

菩駄也菩駄也 bodhaya bodhaya³² (『尊勝』: 362c20)

²⁹ 「怖」は現代方言では[p-]と発音されることが多いが、『廣韻』では滂母（普故切）である。

³⁰ 「撥」は『廣韻』で幫母と滂母の読みがある。今、後者の読みを採る。大正蔵本およびその底本である高麗蔵本（綾装書局 2004 : 560a）では「撥」に作る。大正蔵本の脚注に記された宋本、明本、東寺三密蔵古写本は「發」（非母）に作る。また房山石經本（中國佛教協會・中國佛教圖書文物館 2000 : 71）、磧砂蔵本（易行 2005 : 233）も「發」に作る。よって大正蔵本の「撥」が「發」（非母）の誤りである可能性もある。ちなみに義淨訳『仏説大孔雀呪王經』に/ph/を非母字「發」で音訳する例が見られる。

發麗 phale (T19 : 462c7 ; 田久保 1972 : 13)

窒里發里 triphālī (T19 : 467c4 ; 田久保 1972 : 27)

³¹ 例外として般彈那 Bandhana (『南海』: 51) がある。一般に「般」は幫母字として Skt の/p/に対応する。だが「般」には並母の読みもあるので、ここでは並母字として/b/の音訳に用いられたのかもしれない。また「盤」「槃」等の誤字である可能性もある。

なお以下の非インド語的地名の音訳は考察の対象としない。

婆魯師 Baros (『高僧』: 45)

跋南 Bnam (『南海』: 17 ; 『高僧』: 1)

縛渴羅 Baktra (『高僧』: 11)

³² 仏陀波利訳「蒱駄耶蒱駄耶」から復元された形式（畝部 2015 : 120）およびチベット訳（畝部 2015 : 121）に依った。梵本は vibhodaya (畝部 2015 : 120) となっている。

/bh/ : 並母³³

「婆」

蘇婆師多 subhāśita (『南海』: 175)

咀他揭多揭婆 Tathāgatagarbha (『南海』: 207)

輸婆伴娜 Subhavana (『高僧』: 36)

颯麼三曼多阿婆婆(引)娑 samasamantāvabhāsa (『尊勝』: 362c2-3)

瑣婆(引)婆毘戌(商聿下同)睇 svabhāvaviśuddhe (『尊勝』: 362c3-4)

跋折藍婆跋覩 vajram bhavatu (『尊勝』: 362c17)

「跋」

曷羅社跋吒 Rājabhaṭa /Rājarājabhaṭa (『高僧』: 169)

「薄」

薄伽伐帝 bhagavate (『尊勝』: 362b29)

「毘」

跋臘毘 Valabhī (『南海』: 198)

阿毘詫者 abhiśiñcyā (『尊勝』: 362c4)

「步」

咀闡多步多孤徵鉢唎戍睇 tathatābhūtakotipariśuddhe (『尊勝』: 362c13-14)

「蒲」

半者蒲膳尼 pañcabhojanīya (『南海』: 60)

「鞞」

晡堤木底鞞殺社 pūtimuktibhaiṣajya (『南海』: 163)

³³ 次の2例は Skt の/bh/が並母以外の字で音訳されている。

伐徵呵利 Bhartṛhari (『南海』: 201)

尸羅鉢頗 Śīlaprabha (『高僧』: 133)

一つ目の音訳が Prakrit form “Bhāttihari”に基づいたものであることは本稿脚注 14 を参照。/bh/が奉母字「伐」で音訳されているのは奉母の摩擦的調音によって/bh/の帶気性を表現したものであろうか。

二つ目の例では/bh/が滂母字「頗」で音訳されている。『廣韻』では「頗」に三種の読みがあるがいざれも滂母である（滂禾切、普火切、普過切）。ここで/bh/に対して並母字ではなくわざわざ滂母字「頗」を用いた理由は不明である。なお「頗」はしばしば/bh/の音訳に使われる。例えば、僧伽婆羅訳『孔雀王呪經』波羅頗莎羅 Prabhā-svara (T19: 451b19; 田久保 1972: 22); 真諦訳『婆蘚槃豆法師伝』波羅頗婆底 Prabhāvati (T50: 188a19; 船山 2021: 31; 同書: 67); 真諦訳『隨相論』毘(防夷反) 頗(判何反) 沙 vibhāsa (T32: 158b19; cf. 船山 2021: 93)。また唐初の訳経僧の名である波羅頗蜜多羅(或いは波羅頗迦羅蜜多羅)は Prabhāmitra (或いは Prabhākaramitra) の音訳である。

阿蜜栗多**鞞**師計 amṛtābhiseke³⁴ (『尊勝』: 362c5)

跋折囉跋折囉(引)揭**鞞**(引) vajri vajragarbhe (『尊勝』: 362c16-17)

/m/ : 明母、微母

「摩」

摩哩里制吒 Māṭr̥ceta (『南海』: 178)

三摩近離 sāmagrī (『南海』: 114)

三摩戌和娑阿地瑟恥帝 samāsvāsādhiṣṭhite (『尊勝』: 362c19-20)

「麼」

颯麼三曼多阿婆婆(引)娑 samasamantāvabhāsa (『尊勝』: 362c2-3)

三麼耶阿地瑟恥帝 samayādhiṣṭhite (『尊勝』: 362c12-13)

麼麼 mama (『尊勝』: 362c17)

「曼」

三曼頽鉢唎戍睇 samantapariśuddhe (『尊勝』: 362c21)

「末」

末睇 madhya (『南海』: 141)

室羅末尼羅 śramanera (『南海』: 124)

末爾末爾麼末爾 maṇī mamaṇī (『尊勝』: 362c13)

三末囉三末囉 smara smara (『尊勝』: 362c15)

「莫」

阿離耶莫訶僧祇尼迦耶 Āryamahāsaṃghika-nikāya (『南海』: 10)

「弭」

毗訶羅莎弭 vihārasvāmin (『高僧』: 113)

索訶薩囉曷喇濕弭珊瑚地帝 sahasrakaraśmisamcodite (『尊勝』: 362c8)

「蜜」

阿離耶三蜜栗底尼迦耶³⁵ Āryasaṃmitīya-nikāya (『南海』: 11)

地婆羯囉蜜咀囉 Divākaramitra (『南海』: 207)

³⁴ 仏陀波利訳「阿嚙嚙多毘囉罽」から復元された形式（畠部 2015: 120）に依った。梵本は amṛtābhisaikaiḥ (畠部 2015: 120)、チベット訳は amṛta-abhiṣekair (畠部 2015: 121) となっている。

³⁵ 「三蜜栗底」は saṃmitīya (正量部) の音訳としては「栗」字が余分である。『南海』の校記によると、敦煌本では「栗」字を欠いており（『南海』: 11）、こちらのほうが saṃmitīya に合致する。しかし、いずれの表記が本来のものであるかは分からぬ。

曷羅戶羅蜜咀囉 Rāhulamitra (『南海』: 85)

蜜栗伽悉他鉢娜 Mrgasthāpana (『高僧』: 103)

阿蜜栗多鞞師計 amṛtābhīṣeke³⁶ (『尊勝』: 362c05)

「木」

晡堤木底鞞殺社 pūtimuktibhaiṣajya (『南海』: 163)

「沒」

沒姪囉 mudre (『尊勝』: 362c10)

「目」

阿目羯寫 *amoghasya³⁷ (『尊勝』: 362c17)

「謨」

阿奴謨柂 Anumoda³⁸ (『南海』: 68)

南謨 namo (『尊勝』: 362b29)

「慕」

阿離耶慕擺薩婆悉底婆拖尼迦耶 Āryamūlasarvāstivāda-nikāya (『南海』: 11)

慕擺健陀俱胝 Mūlagandhakutī (『高僧』: 115)

更に微母字「文」が/m/に対応する。

文荼 Muṇḍa (『南海』: 192)

微母字による音訳例はこの1例のみであるが、これは既存の音訳を踏襲したものではなく、当時の発音に基づいた音訳であると思われる。橋本2021で指摘したように、初唐期の複数の対音資料に微母字「文」「勿」が外国語のmに対応している例が見られ、それらは微母字「文」「勿」の声母部分が当時まだ十分な摩擦音化や脱鼻音化を起こしておらず鼻音性を保存していたことを示している（橋本2021: 135-138）。

以上のように、義浄の音訳漢字ではSktの両唇音/p//ph//b//bh//m/を音訳する際、

³⁶ 仏陀波利訳「阿嚙嘍多毘曇罽」から復元された形式（畠部2015: 120）に依った。梵本はamṛtābhīṣaikaiḥ（畠部2015: 120）、チベット訳はamṛta-abhiṣekair（畠部2015: 121）となっている。

³⁷ 本稿筆者の推定による。仏陀波利訳では該当箇所に「受持者於此自稱名」(T19: 352b18)とあり、ここで陀羅尼の受持者自身の名前を唱えるように指示されている。梵本はdoyagasya（畠部2015: 120）となっている。

³⁸ 宮林・加藤2004: 87を参照。王邦維氏は原語をAnumataとするが（『南海』: 69）、音訳と合わない。

基本的に重唇音字を用いており、ごく一部を除き軽唇音字は用いない。義淨訳『仏說大孔雀呪王經』でも同様である³⁹ (Coblin 1991 : 70 ; 劉廣和 1994 : 409 ; 劉廣和 2002 : 134 ; 王思齊 2015 : 259-260)。要するに義淨の音訳漢字では重唇音と軽唇音がほとんど混じていない。このことは義淨当時の軽唇音がすでに唇歯音化を起こしていたことを間接的に示している⁴⁰。従って義淨の音訳漢字において Skt の/v/が並母で音訳される傾向は、漢語側において軽唇音が唇歯音化以前の状態にあったことを示すものではなく、インド側の音声面および字形面における/v/と/b/の混乱を反映したものと考えるのが妥当であろう。

5. まとめ

本稿では義淨の音訳漢字における Skt の/v/に対する音訳方法を分析し、/v/が並母字で音訳される傾向が強いことを示した上で、その理由がインド東部の方言的特徴にある可能性を指摘した。

梵漢対音を用いた従来の漢語音韻史研究では漢語側の音価の議論に終始することが多く、Skt の/v/の具体的な音価についてはあまり考慮されてこなかった。本稿では Skt 音の音価を検討することで、これまで十分に説明できていなかった義淨の音訳漢字における/v/の音訳方法について新たな視点をもたらし、また同時に梵漢対音研究においてインド原音を検討することの重要性をも示すことができたと思う。

本稿は日本学術振興会令和元年度～令和 3 年度科学研究費補助金研究活動スタート支援 19K23046：研究課題「対音資料による唐代音韻史の研究——初唐时期を中心に」による成果の一部である。

³⁹ Skt の両唇音が軽唇音字で音訳されている例も少数見られるが、いずれも既存の音訳を踏襲したものである（王思齊 2015 : 259-260）。

⁴⁰ 対音資料を用いて軽唇音の唇歯音化を示すことはできても、軽唇音声母の音価が破擦音（非母[pf-]、奉母[bv-]等）と摩擦音（非母[f-]、奉母[v-]等）のいずれであったか、音韻的に独立していたかを推定することには限界がある。また対音資料に現れない一部の軽唇音が唇歯音化していなかった可能性は否定できない（橋本 2021 : 134）。微母は対音資料において外国語の m に対応することが少ないとから唇歯音化していた可能性が考えられるが、摩擦音化や脱鼻音化は生じていなかったと思われる（橋本 2021 : 137）。ただ 8 世紀以前の反切資料では微母と明母の通用が比較的多いことから、微母の唇歯音化の進行が他の軽唇音声母よりも遅れていた可能性は引き続き検討する必要がある。

参考文献

日本語文献（五十音順）

- 畠部俊也 2015 「梵文『仏頂尊勝陀羅尼經』と諸訳の対照研究」，『名古屋大学文学部研究論集』61：97-146 頁
- 田久保周誉 1972 『梵文孔雀明王經』，東京：山喜房仏書林
- 東京大学国語研究室編 1986 『古訓点資料集 1』，東京大学国語研究室資料叢書 15，東京：汲古書院
- 東洋文庫監修、石塚晴通・小助川貞次解題 2014 『梵語千字文／胎藏界真言』，東京：勉誠出版
- 橋本貴子 2018 「悉曇文字の字形から見た『悉曇字記』の問題点—語頭の長ī, cha, ḍha を表す文字の字形を中心にして—」，『東洋学報』100(3)：1-23 頁
- 2019 「対音資料から見た初唐の匣母の音価について—義淨の音訳漢字を中心に—」，『開篇』37：67-80 頁
- 2021 「対音資料から見た唐代の軽唇音化について：附論 日母の脱鼻音化」，『神戸外大論叢』73(3)：121-146 頁
- 肥爪周二 1993 「悉曇学とワ行」，『国語と国文学』70(2)：42-57 頁
- 船山徹 2020 「『出要律儀』佚文に見る梁代仏教の音写語」，『東方学報』95：522-402 頁
- 2021 『婆薮槃豆伝—インド仏教思想家ヴァスバンドゥの伝記』京都：法蔵館
- 梵字貴重資料刊行会編 1980 『梵字貴重資料集成 図版篇』，東京：東京美術
- 松田和信 1982 「梵文断片 Loka-prajñapti について—高黄寺・玉泉寺・四天王寺・智恩寺貝葉・インド所伝写本の分類と同定—」，『仏教学』14：1-21 頁
- 1989 「東寺・海龍王寺貝葉考—アビダルマ写本研究 (3)—」，『印度學佛教學研究』37(2)：909-905 頁
- 2010 「中央アジアの仏教写本」，奈良康明、石井公成編 2010 『文明・文化の交差点』119-158 頁，東京：校成出版社
- 2021 「清涼寺貝葉」，『仏教学部論集』105：47-53 頁
- 松本照敬 2007 『梵語千字文』の原語比定，『成田山仏教研究所紀要』30：35-101 頁
- 宮林昭彦・加藤栄司訳 2004 『現代語訳 南海寄帰内法伝—七世紀インド仏教僧伽の日常生活—』，京都：法蔵館

中国語文献（ピンイン順）

大正一切經刊行會 1924-1932《大正新脩大藏經》全 88 卷，東京：大藏出版【略称：

】

段晴 2013《于闐·佛教·古卷》，上海：中西書局

李建強 2017a《敦煌·對音·初探—基於敦煌文獻的梵、藏漢對音研究》，北京：中國社會科學出版社

—— 2017b《菩提流志主譯《不空羈索》咒語聲母對音比較研究》，《語言科學》16(1): 89-99 頁

劉廣和 1994《大孔雀明王經咒語義淨跟不空譯音的比較研究—唐代中國北部方言分歧初探》，《語言研究》1994 年增刊：408-414 頁

—— 2002《音韻比較研究》，北京：中國廣播電視出版社

—— 2011《《佛頂尊勝陀羅尼》大正藏九種對音本比較研究—唐朝中國北部方言分歧再探》，《中國語言學》5: 57-70 頁

施向東 1983《玄奘譯註中的梵漢對音和唐初中原方音》（摘要），《語言研究》1983 (1): 27-48 頁

—— 2009《玄奘譯註中的梵漢對音和唐初中原方音》（全文），施向東 2009《音史尋幽——施向東自選集》1-79 頁，天津：南開大學出版社

石塚晴通 2015《從 Codicology 的角度看漢文佛典語言學資料》，徐時儀·梁曉虹·松江崇編《佛經音義研究：第三屆佛經音譯研究國際學術研討會論文集》：332-342 頁，上海：上海辭書出版社

王邦維校注 1988《大唐西域求法高僧傳校注》，北京：中華書局

—— 校注 1995《南海寄歸內法傳校注》，北京：中華書局

王思齊 2015《義淨譯《佛說大孔雀明王經》中的唐代北方方言聲母系統》，《西域歷史語言研究集刊》8: 257-264 頁

—— 2017《佛說大孔雀明王經》中的北方方言韻母系統，《古漢語研究》2017 (4): 42-55 頁

綫裝書局影印 2004《高麗大藏經》21，北京：綫裝書局

葉少勇 2005《原民族宮藏梵文寫本的字體研究》，北京大學碩士論文

易行編輯 2005《磧砂大藏經（影印宋元版）》第 35 冊，北京：綫裝書局

中國佛教協會·中國佛教圖書文物館編 2000《房山石經》（遼金刻經）第 11 冊，北京：華夏出版社

欧文文献（アルファベット順）

- Allen, W. S. 1953. *Phonetics in Ancient India*, London: Oxford University Press.
- Brough, J. 1973. I-ching on the Sanskrit Grammarians. *Bulletin of the School of Oriental and African Studies, University of London*, 36(2): 248-260.
- Bühler, G. 1904. *Indian Paleography*, English edition translated by J. F. Fleet, reprinted in 2004, New Delhi: Munshiram Manoharlal.
- Chatterji, S. K. 1960. The Pronunciation of Sanskrit. *Indian Linguistics* 21: 61-82.
- Coblin, W. S. 1991. A Survey of Yijing's Transcriptional Corpus (義淨梵漢對音探討). 『語言研究』1991(1): 68-92 頁。
- Dani, A. H. 1963. *Indian Palaeography*, reprinted in 1986, New Delhi: Munshiram Manoharlal.
- Hashimoto, T. 2015. Siddham Script in the University of Tokyo Manuscript of the Chinese Version of *Ārya-Mahā-Māyūrī Vidyā-Rājñī*. *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 18: 263-273.
- Masica, C. P. 1993. *The Indo-Aryan Languages*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Melzer, G. 2014. A Palaeographic Study of a Buddhist Manuscript from the Gilgit Region: A Glimpse into a Scribes' Workshop. In: Quenzer, J., Bondarev, D. and Sobisch, J. eds. *Manuscript Cultures: Mapping the Field*. Berlin, München, Boston: De Gruyter: 227-272.
- Pischel, R. 1981. *A Grammar of the Prākrit Languages*, second revised edition reprinted in 1999, Delhi: Motilal Banarsi Dass.
- Sander, L. 1968. *Paläographisches zu den Sanskrithandschriften der Berliner Turfansammlung*, Verzeichnis der Orientalischen Handschriften in Deutschland, Supplementband 8, Wiesbaden: Franz Steiner Verlag.
- Whitney, W. D. 1896. *Sanskrit Grammar*, third edition reprinted in 2003, New York: Dover Publications.
- Ye, S. 2008. A Paleographical Study of the Manuscripts of the *Mūlamadhyamakārikā* and Buddhapālita's Commentary. *Annual Report of the International Research Institute for Advanced Buddhology at Soka University* 11: 153-175.

On the Chinese Transliteration of Sanskrit /v/ in Yijing's Works

Takako Hashimoto

Kobe City University of Foreign Studies

[Abstract] After the end of the 6th century, due to a sound change of /v/ in eastern Indian dialects, the sounds /v/ and /b/ were represented by the same letter in eastern India. A Chinese Buddhist monk, Yijing (義淨), spent about 10 years in the late 7th century in eastern India, and after returning to China, he translated the Buddhist canons into Chinese from the end of the 7th century to the beginning of the 8th century. Through an analysis of Yijing's transliteration of Sanskrit /v/, this paper identifies that he tends to be transliterate /v/ with Chinese characters with *bing* initials, which may reflect the pronunciation of /v/ in the dialect of the part of eastern India where he resided.